

2001 年度夏季語学研修（中国）報告

山 本 忠*

A Report on Summer Chinese study in Shenyang University of Technology in 2001

Tadashi YAMAMOTO

Abstract

The first Summer Chinese study program for the students of Hachinohe Institute of Technology was held in Shenyang University of Technology, China.

Four students and two residents of Hachinohe city joined this program, and they achieved good results and made progress in studying Chinese language and developed their understanding of inter-culture.

Key words: Chinese language, understanding of inter-culture, cosmopolitan outlook

1. はじめに

本学では英語の海外語学研修を昨年までに6回行い、それぞれ語学力の向上、異文化理解、国際交流等の面で大きな成果を収めてきた。本年の海外語学研修 WG の席上、同様の中国語の語学研修が提案され、実施に移された。今回は参加者数は6名と少数であったが、英語の海外語学研修と同様に大きな収穫を得ることができ、その様子は FAX による日報で本学に報告した。本稿は10月11日に開かれた拡大教務委員会で行った口頭報告を基に、引率教員の視点から現地と参加者の状況および反省点を報告するものである。

2. 研修の目的

① 座学と中国滞在期間の生活における実践を通して会話を主とする語学力を向上させ、②

五感をフルに利用して中国を体験し、中国の社会、文化、歴史、習慣の理解を深め、③ 国際感覚を養うことを目的とした。

3. 研修日程、研修先、旅行業者

研修期間は2001年8月19日から9月2日の15日間で、この間の日程は別表(スケジュール)に示すが、一部内容は現地到着後変更された(後述)。研修先は本学と学術交流の提携を結んでいる中国瀋陽工業大学の国際交流センターとし、渡航に関する手続きは連絡の利便性を考慮して地元の旅行業者(注1)に依頼した。

4. 参加者

学生の参加者は、機械情報工学科1年東島真澄、電気電子工学科2年星川雅紀、エネルギー工学科2年大須賀靖浩、電気電子工学科4年谷口真理の4名で、これに社会人同行者として田鎖亮一、高梨恵美子の2名が加わった。社会人の参加は当初の募集計画にはなかったが、今回

平成13年12月21日受理

* 総合教育センター・講師

スケジュール

日数	月日	曜日	発着地	時刻	行 動 予 定	食事
1	8/19	日	千歳空港発 瀋陽空港着	13:30 15:40 (現地時間)	千歳空港集合 11:00 出国手続後空路瀋陽へ 到着後入国手続、バスで大学へ	夕
2	8/20	月			〈午 前〉 語学講座 1 〈午 後〉 学内見学 瀋陽テレビ塔	朝昼夕
3	8/21	火			語学講座 2	朝昼夕
4	8/22	水			語学講座 3 遼寧省博物館	朝昼夕
5	8/23	木			語学講座 4	朝昼夕
6	8/24	金			講座 今日中国 農村観光	朝昼夕
7	8/25	土			本溪水洞見学	朝昼夕
8	8/26	日			自由行動	朝昼夕
9	8/27	月			語学講座 5 瀋陽故宮	朝昼夕
10	8/28	火			語学講座 6	朝昼夕
11	8/29	水			千山風景地区	朝昼夕
12	8/30	木			語学講座 7	朝昼夕
13	8/31	金			新楽遺跡 北陵	朝昼夕
14	9/1	土			市場観光	朝昼夕
15	9/2	日	瀋陽空港発 千歳空港着	(現地時間) 13:30 15:40	空路 帰国の途へ	

※現地都合によりスケジュールが変更となる場合があります。

は定員に余裕があることから特別に認められたものである。

5. 生活環境

瀋陽市は最も近い海岸から 160 km 離れているため内陸性の気候で、昼夜の温度差が 10 度か

ら 15 度あり空気は比較的乾燥している。本研修期間中は日中の最高気温 30 度前後、早朝の最低気温 17～18 度と夏としては比較的過ごしやすかった。

宿舎は大学構内にある 4 階建ての留学生宿舎で、ツインの部屋に学生は二人ずつ、社会人と引率教員は個々に宿泊した。各部屋にはバス・

トイレ、エアコン、衛星テレビ、電話が整えられており、テレビは中国国内のチャンネルのほか NHK-BS（注 2）も受信でき、日本の大きなニュースを知ることができたのは有難かった。

日本への連絡手段で最も速く確実なのは、宿舎一階にあるカード専用の電話で、カードさえあれば 24 時間使用できた。その次は外事処処長室にある FAX だが、外事処処員が不在の時は使用できないため、日報の FAX 発信は外事処処員の出勤直後の現地時間 8 時台が確かであった。

日本からの連絡もほぼ同様で、宿舎（別棟）一階の受付カウンターへ国際電話を掛け、呼び出してもらうのが最も確実で、次は外事処処員の FAX となる。

宿舎には一階に小食堂、二階に宴会用大食堂があり、我々は二階の食堂の 1 テーブルで三食取った。食事を大切にするお国柄を反映して、質、量共に大変充実していた。日帰り小旅行の日を除いて朝食 7 時半、昼食 12 時、夕食 18 時と時間通りに出され、三食とも本場の中国料理で、朝食はお粥、金糸餅（注 3）、マントウ等を主食にキュウリや大根の和え物、漬物など野菜を中心にした副菜（写真 1）、昼食と夕食はご飯か麺類を主食に豚、牛、羊、鶏の肉類と野菜の炒め物の他、必ずスープが付いた。この厨房には粉食（餃子や麺類など）、炒め物、揚げ物など専門化されたコックが数人配置されていて、

プロの味を提供している。中国の習慣に従い客人には食べきれない程の分量が出されるが、ここで食べ過ぎた者は度々胃腸薬のお世話になった。

海外での生活環境で最も心配されることは、治安の良否であろう。日本でもそうだが、中国にも近づくべきでないところはある。幸いなことに、瀋陽工業大学付近は多数の工場とそこに勤務する労働者、職員の居住地区であるため治安は良い方だといえる。しかし、スリ、置き引き等の被害は時々聞かれるので、見学、小旅行では特に注意を促した。実際こうした被害は受けず、また危険を感じることもなかった。

6. 語学講座

教室は宿舎一階の 18 人用と 12 人用小教室のどちらかを使った。ビデオ、テープレコーダといった簡単な視聴覚設備を備え、きれいに整備された教室で気持ちが良かったが、エコーがかかって教師の声がやや聞き辛く感じられたこともあった。

瀋陽工業大学の一般学生の授業は午前中 8 時から 50 分授業が 10 分の休憩を挟んで 4 コマ設定されているが、我々の講座は朝 8 時半から 3 コマで、12 時前には自室に戻ることができた。

担当教師の徐原清先生は外事処に所属する 30 代の女性教師で（写真 2 中央）、地元瀋陽医科



写真 1



写真 2



写真3



写真4

大学を卒業した後、夫と共に札幌と東京に計7年間医学の研究と中国語教育に従事した経歴を持つ。巻舌音と歯擦音に時折瀋陽方言が聞かれる他は、女性らしいきれいな普通話を話す。

テキストには、外国人に対する中国語教育で定評のある北京語言文化大学から出版された「漢語口語速成」シリーズの内「入門篇上」が用いられた。本書各課は、① 新出単語、② 3乃至4つの部分からなる本文、③ 表現に関する注釈、④ 文法説明、⑤ 対話練習、⑥ 描写、説明を中心とした総合練習から構成されており、⑤と⑥は挿絵に基づいて練習する形式が多く取り入れられており、会話のテキストとして大変有用であると感じた。

毎時間の授業の流れは、教師が先ず本文を板書し受講生が書き写すことから始め(注4)、未習の語彙の確認と説明、本文のコーラス・リーディング、個別の発音矯正、二人ずつ対話形式のリーディング(写真3)で十分読み慣れたあと、教師の問いかけに答える形式と、受講生同士の対話練習へと進められた。指導に使われた言語は、講座の始めはほとんど日本語で、回が進むに従って中国語の割合を増やし、受講生に無理なく聴力を高めるよう配慮しているように感じられた。

受講生の受講態度は終始良好であった。発音練習、音読は少人数にも関わらず声が教室に満ち、教師に対する質問もよく聞かれた(写真4)。



写真5

筆者の予想に反して、外国での語学研修であるにも関わらず皆緊張した様子もなく、実に伸び伸びと受講していたのが印象的であった(写真5)。担当教師の温厚な人柄と異国にいることの開放感によるものであろう。

7. 見 学

瀋陽の名所の一つである北陵公園は整備期間中のため見学は叶わなかったが、代わりに九一八歴史博物館を見学した。ここは、1931年9月18日瀋陽市郊外の柳条湖で起きた鉄道爆破事件から始まった日中間の戦争の事実を後世に伝え、この悲惨な歴史を二度と繰り返さないよう学習するために建てられ、館内にはパネルと模型による詳しい展示がある(写真6)。ここで



写真 6



写真 8



写真 7



写真 9

学生達は平均的な見学時間の2倍の時間をかけて熱心に見学していた。

一般的な観光旅行では農村の様子を見聞する機会はほとんど望めないが、本研修では外事処の計らいで普通の農家を訪ね、直接農民と話をする機会を得た。突然の訪問にも関わらず、主は気さくに我々を歓迎し、農作物の出来具合を語ってくれた。それによると、主として栽培している米は水不足に苦しんだがまずまずの出来栄え、その他日本でもお馴染みの野菜も良いできであるという。歓談後、自宅横の畑の落花生を一株抜いて出来栄えを見せてくれた（写真7）。自家用の野菜は全て無農薬で栽培しているとのことだった。

この他には遼寧省博物館、瀋陽故宮（写真8）、新楽遺跡（写真9）を見学した。

8. 小旅行

日帰りの小旅行として、本溪市の鍾乳洞、鞍山市の千山、瀋陽市郊外の怪坡で遊んだ。

鍾乳洞内部全面は川のようになっており、観光ボートで往復できるようになっている。悠久の時間が作り上げた創造物に皆歓声をあげカメラを向けていた。

千山は最高峰でも500m程だがその名の通りたくさんの峰が連なる山地で、道教の道観と仏教の寺院が同居する珍しい山である。思いがけず急峻な山道を半日登ることとなったが（写真10）、登山部部員でもある学生二人の協力を得て、全員無事下山できた。



写真 10

9. 自由時間

スケジュール表によれば自由時間が多く設定されているが、暇を持て余す者は一人もいなかった。逆に、疲れた体を癒したり、露天の小店やデパートでの買い物、大学構内見学、現地市民の生活模様の探索、宿舎の若い服務員や韓国留学生との交流など貴重な時間として費やされ、帰国後参加した学生から自由時間をより多く設定するよう希望する声が聞かれた。

10. 今後に向けて

本研修で得られた成果を以下にまとめる。

① 短期間の語学研修ではあったがそれぞれ語学力の向上が見られ、各地の見学、小旅行、自由時間の体験を通して中国社会に対する理解が深まった。

② 研修期間を通して大きな事件、事故がなかった。

③ 特別参加の社会人と学生が相互に良い影響を与えた。即ち、年齢層の異なる参加者それぞれの長所、欠点を補完する場面が何度も見られた。

④ 地元の業者に旅行業務を依頼したので、連絡、対応が迅速でスムーズであった。

一方、今後同様の企画に向けては下記の項目についての改善、検討が必要であると思われる。

① 今回は参加者全員が風邪または下痢(注)に悩まされたことから健康管理の徹底が必要である。

② 現地受け入れ部門との綿密な連絡。現地到着時間を事前に電話で報告したが不十分であったため空港で行き違いになった。FAX などその他の通信手段を併用する必要がある。

③ 現地と本学との連絡手段に、電話・FAX の他、電子メールの利用によって、情報交換の迅速化、省力化を図る必要がある。

④ 社会人の参加については、今回は特例として認めたが、今後同様の希望者ができることを予想して制度化するか否かを含めて検討しておく必要がある。

⑤ 研修先大学の学生との交流を研修項目に加える。

⑥ 引率者の複数化を図り、本学教職員の提携校に対する理解を深める機会を設ける。

⑦ 早い時期から募集活動を始め、より多くの参加者を募る。

⑧ その他、実施期間、研修先についても検討すべきであろう。

11. おわりに

筆者は6年前日本語教師として1年間瀋陽に滞在する機会を与えられたが、海外への引率は初めての経験であった。参加者には出来るだけのサービスをする心構えで臨んだつもりであるが、至らぬ点はご容赦を乞う次第である。本報告が次回の企画に参考となることがあれば幸いである。

謝 辞

本企画が無事に遂行されたことについては、受け入れ側の瀋陽工業大学、並びに本学の関係部門諸氏の理解と支援の賜物と感じている。改めてここに感謝申し上げる。

注

- 1 近畿日本ツーリスト八戸支店
- 2 海外向け放送で国内の番組とは内容が多少異なる
- 3 瀋陽の名物料理。小麦粉を水で練って焼いたもので、解すと金色の糸状になる
- 4 本文が比較的短かったため、別にテキストは配布されなかった
- 5 原因は特定できないが、油の多い料理の過食やストレスが考えられる